

第三編 日米間の「密約」

—インタビューⅡ—

Authority <u>801956</u>	
By <u>NR</u> NARA Date <u>4/26/05</u>	

~~SECRET~~ **SANITIZED COPY**

Okinawan Reversion: Cats and Dogs

The May 15 reversion ceremony consummated the long-held aspirations of the Okinawan and Japanese people for the return of the Ryukyus to Japanese control, and resolved the last remaining major issue between the United States and Japan arising from World War II. Basically, we agreed to reversion because we felt it was the best means of assuring the maintenance of our security relationship with Japan and the use of our bases there and in Okinawa.

Reversion will not, however, put an end to the many irritants and problems currently existing between the U.S. Military Forces in Okinawa and the almost 1 million people of the Ryukyus. Some of these problems are long-standing while others are the direct result of agreements reached between the U.S. and Japan during the reversion negotiations. The four problems are private Okinawan claims against the U.S. Government, the nuclear removal statement, the removal of U.S. military aircraft from Naha Air Base at the south end of Okinawa, and the VOA relay station on Okinawa. Japanese leaders might raise one or more of them with you, probably principally because the first three in particular have been the objects of opposition attacks on the Sato Government over the past half year.

Private Okinawan Claims Against the U.S. Government

1. Background. During the reversion negotiations, the GOJ insisted that the USG should pay for damages done to Okinawan lands which were damaged by U.S. forces prior to July 1950 and released after July 1961. The U.S. refused because it had already compensated affected land-owners whose lands had been released before 1961, and had informed Congress in 1965 that it would not ask for more funds for this purpose. However, the Japanese offered to provide funds for the outstanding claims (estimated at not more than \$4 million) if the U.S. would process and disburse them on an ex gratia basis. This sum was added to the \$316 million that Japan had agreed to pay us in connection with Reversion.

The sensitive point for the GOJ was that this \$4 million figure and the classified U.S. - GOJ understanding on this subject not be made public, since the opposition would claim -- with justification -- that in effect the GOJ rather than the USG was paying the claims. The confidentiality of this understanding was compromised in late March, however, by a leak of several Foreign Office telegrams. (As noted below we are cooperating with the Japanese Government to try to continue the confidentiality of the essentials of this arrangement.) The leak also resulted

DECLASSIFIED
E.O. 12958, Sect. 3.6
~~SECRET~~ MR-NR 98-99/S Sec. 3.4(b)(4)
By 4/26/05 NARA Date 4-15-05

沖縄返還をめぐる財政密約について触れた米公文書
「沖縄返還：上へ下への大騒ぎ」（沖縄県公文書館所蔵）

第一章 「車の中でしょつらゆう『イントロダクション』とつぶやいていた」核密約

大平・ライシャワー会談

——一九六〇年の日米安保条約改定の際に、いわゆる事前協議制が導入されることになりました。これによりアメリカ政府は、米軍の「日本国への配置における重要な変更」「装備における重要な変更」「日本国から行なわれる戦闘作戦行動」に際して、日本政府と事前に協議することとされたわけです。具体的には、核兵器の日本への持ち込みや、日本から他国への米軍の出撃などが日本との事前協議事項となりました。ところがアメリカは、岸内閣期の一九六〇年一月の藤山愛一郎外相とマッカーサー駐日アメリカ大使による会談の討議記録にもとづき、事前協議の対象となる核兵器の日本への「イントロダクション（持ち込み）」とは、配備や貯蔵の場合に限定されると解釈してきたわけです。討議記録そのものが秘密とされ、またアメリカ側の解釈が討議記録からは明らかではないため、日米間でたびたび認識の齟齬が生じていました。

一九六三年四月四日、大平外相とライシャワー駐日大使との会談で、岸内閣期のいわゆる核密約が確認されます。この会談のきっかけとなったのは、同年一月にアメリカ政府が原子力潜水艦の日本寄港を正式に申し入れた問題に対する池田勇人首相の国会答弁でした。池田首相は、「核弾頭を持った船は、日本に寄港はしてもらわない」（一九六三年三月六日参議院予算委員会）と述べましたが、これはアメリカ側の「イントロダクション」の解釈を否定するもの

でした。核密約について初めて聞かされた大平外相は、核を搭載したアメリカ艦艇の日本寄港が事前協議の対象にならないということをおっしゃりと認めてしまっているようです。この大平・ライシャワー会談について、大平外相から何かお聞きになっていますでしょうか。

森田 会談内容については直接聞いておりませんが、いつもは霞友会館^{かゆう}という英国大使館すぐそばの外務省の附属施設で会談していたのに、あのとときに限って会談の場所を公邸か何かにしてくれという秘書からの電話があつて、「ああ、これはちょっと中身があるのだなあ」と感じました。会談場所の設定は、事務の秘書官ではなくて私がやっていただけだね。ライシャワーとの会談には私は入っていません。会談に事務の秘書官が入っていたかどうか分からないのだけど、入っている可能性はあります。

この「イントロダクション」というのはずっと大平は悩んでおりました。正確には「introduction into Japan」というのですよ。それで、その語感として、大平は「introduction into Japan」というと核を上陸させてどこかに設置するというニュアンスで、核装備をした船が寄港するというのは「introduction into Japan」という英語の訳からは出てこないんじゃないかという感じを、初めて聞いたときから持っていたのじゃないかと思えますよ。

—— 岸内閣のときのいわゆる核密約というのを、少なくとも大平外相は当初は知らされていなかったのですか。
森田 そうです。ライシャワーとの会談のときまで知らなかった。

—— 大平・ライシャワー会談記録を読みますと、ライシャワーは「大平と完全なる相互理解に達した」、つまりアメリカ側の解釈で合意に達したと書いてありますが。

森田 大平は、ライシャワーさんから聞いたときに、私の感じでは、それはもう当然だと思つたはずですよ。あとは、そのときから晩年まで大平の頭にあったのは、非核三原則のうち「持たず」「作らず」はいいとして、「持ち込ませ

ず」というのは米軍の「イントロダクション」との関係で無理なので、二・五原則だと。二・五原則で「イントロダクション」について国民の了解を取らなければいけないという意識がずっとありましたよ。

—— 実際には、池田内閣以降の歴代政権も、核搭載艦船の寄港も事前協議の対象になるという答弁を繰り返しています。また、佐藤政権のときには非核三原則が打ち出されました。

森田 大平はコメントはしなかったけれども、雰囲気としては、あんまり非核三原則をやかましく言わない方がいいのになあという感じを持っていました。三原則を説明すればするほど、自分が国民に対して「イントロダクション」について説明する、理解させるといのが難しくなりますから。だいたい、核を外して入港するという話は非現実的だという風に考えている国民が結構多かったのだと思うのです。

—— 正直に説明すれば国民は分かってくれるのじゃないかという期待が、大平先生の心の中どこかにあったという事なのですか。

森田 あった。それに国民に説明することが政治の責任だと考えていた。いつまでも、事前協議があるはずだといっただけではどうかという感じを持っていた。

—— そうですね。そういうお立場からすると、佐藤政権の非核三原則というのは、まあ欺瞞的とはいっていいけれども、やや……。

森田 あまり強調しない方がいいのになあという感じを持っていたと思いますよ。そのときの様子からみると。国会答弁なんかで、「核を装備している船は、核を沖繩かどこかで外して日本に入港してくるのだ」という答弁まであって、それはちよつと非常識じゃないのという感じを、大平は持っていたと思うのですよね。国民に嘘をつくのはいま、そういうのはつきりとした信念があったから。

—— かといって、寄港を認めますというところまで言っていないかということ、それは難しかった。

森田 それは政治問題だ。ライシャワーとの会談の後から、車の中でしょっちゅう「イントロダクション、イントロダクション」と言っていました。一回目の外相から総理になるまで言っていました。

—— 森田先生は、大平先生本人から秘密合意の存在について聞くことはなかったけれども、一九六三年四月の大平・ライシャワー会談の後くらいから、大平先生が車の中で「イントロダクション」とつぶやいていたのは聞いていたのですね。

森田 何回も言っていましたよ。一回や二回ではない。死ぬまでずっと言っていましたから。ライシャワーさんは、大平に話したという事で一丁上がりという感じなのだけど、大平の方は国民にどう説明するかということをもっと考えていた。これはもうライシャワーさんの言う通りだと。問題はこれを国民に分かってもらわなければいけないと。寄港はこれもうしょうがないのだという。

—— ライシャワーさんの言う通りだという言葉を、大平先生がおっしゃっていたのでしうか。

森田 いや、その通りのことは言っていないけども、雑談で話しているときにその種類の発言はしていました。

—— 細かい聞き方になって恐縮なのですが、池田政権期から、大平先生が車の中で「イントロダクション」と言っていたとき、ライシャワーの名前は出ましたか。

森田 出てこない。「イントロダクション」だけ。

—— 「イントロダクション」については認めることを、国民に説明しないといけないという言い方ですか。

森田 本人の言葉として出たのは「イントロダクション」だけ。考え事をしながら。私がじっと聞いていたら、「イントロダクション」とつぶやいた。その前に、ライシャワーさんの言う通りだという本人の気持ちは分かっている。

ましたから、そうしたらあとは本人が悩んでいるのは国民にどう理解してもらうかだなと、私は思っていたということです。

—— いま、思い出されてみて、大平先生の言葉そのものを正確に教えていただけないでしょうか。

森田 「イントロダクション」だけ。本人には、私が聞いているという意識はなかったと思いますよ。思わず口を出たという。

—— 「イントロダクション」を何とかしなければいけないあ、という言い方ではないのですか。

森田 そんなものはない。それだと私に対する話しかけになってしまうから。そういうのではなくて、本人がつぶやいているのを私が聞いた。小さい声で。私に言ったことではないのです。本人が「イントロダクション」と発言したということも、本人は覚えていないと思います。考えごとをしていて思わず口に出ってしまった。

—— そうなると、大平先生はライシャワーから秘密合意解釈の存在を告げられた直後から、国民に対してどう説明すべきかという、秘密合意の解決方法をずっと考えてらっしゃったのですね。

森田 そうそう。そう考えていることを、別にライシャワーには説明していませんよ。それはあくまで日本側の話ですから。

—— しかし、アメリカは戦略上、船に核を搭載しているかどうかは言わないわけですね。アメリカ側が言わない以上、事前協議の対象として核搭載艦船の寄港の問題を取り上げないということは、ある意味、日本政府側の知恵だったと思うのですね。

森田 しかし、大平は、政治の実態について国民に秘密を持つというのは、そもそもだめだという考えでした。国民の了解のもとに政治をやるのが当たり前だという信念でした。